ミンガラバー こんにちは

認定 NPO法人
日本・ミャンマー
医療人育成支援協会
〒700-0815
岡山市北区野田屋町2-4-18
TEL：086-224-0102
FAX：086-221-2554
URL：http://www.mjcp.or.jp

修了式の後、お祝いに駆けつけた先輩らと一緒に記念撮影＝ヤンゴンの国民健康財団の前庭

5年間で100人 達成

准助産師育成の「あかね基金」

3年延長、さらに60人

ミャンマーには医療が行きわたらない地域がまだ多い。そこで働く准助産師を毎年20人ずつ、5年間で100人育てる奨学金制度「あかね基金」が目標を達成し、最後の5期生の修了式が9月30日、ヤンゴンであった。基金を設立した協会の西山央子理事は、1～4期生の仕事ぶりが成果をあげていることから、奨学金制度を3年延長し、さらに60人を育成することにした。

ミャンマーで助産師の資格を取るためには2年間の勉強が必要だが、准助産師は半年の研修でよい。1～5期生100人は皆エーヤワディー管区のチャウンゴン郡区の貧しい農村出身。総合病院でそれぞれ半年間、寮に泊まり込みで研修を受けた。研修費は西山理事の出資をもとに協会員らに呼びかけた募金を合わせた「あかね基金」で負担した。

5期生の修了式と前日のパーティには1～4期生の中から20人が招待された。協会から出席した岡田茂理事長、西山理事、ミャンマー側のタンセイン国民健康財団理事長、ミョウキン元国立医学研究局長らと門出を祝った。式では研修を担当した病院のエーナイン院長がこの数年、チャウンゴン郡区の農村部で妊婦の死亡、流産や新生児の死亡が大幅に減ってきたことを数字で説明、「これは准助産師育成の成果」と話した。

来年から延長する3年間は、チャウンゴン郡区の隣のミャウンミャ郡区を対象にする。毎年、やはり農村出身の20人ずつを郡区病院で研修する。

ミャンマーでの准助産師育成については今年度、岡山県の「岡山発国際貢献活動事業」に採択された。助成金50万円を協会は5期生修了式の関連費用にあてた。

介護福祉士めざす 岡山で1期生2人

「あかね基金」で准助産師になった1期生の中から2人が9月末に来日し、介護福祉士をめざしている。インインティさん＝**写真左**＝とノゥサムナートゥさん＝**同右**。岡山市北区の社会福祉法人「旭川荘」が招き、協会も当面の生活費の一部を援助している。

2人は来年3月までの半年間、岡山外語学院に通って日本語を学ぶ。その後2年間、旭川荘の専門学校で勉強し、日本の介護福祉士の試験に挑戦する。

母子の死亡、減りました

協会理事　西山央子

この5年間、春と秋に私はミャンマーを訪れました。「あかね基金」からの奨学金を受けて准助産師をめざす研修生の始業式と修了式への出席です。

最初の年の始業式で、緊張し不安げな1期生の姿をみて「わずか半年の研修で大丈夫かな」と、はっきりいって心配になりました。それが秋の修了式では、見違えるように希望と使命感にあふれていました。その後も毎年秋、同じ表情に出会い、1人ひとりに聴診器や血圧計、赤ちゃん用体重計などがセットの助産師の”7つ道具”を贈って門出をお祝いしました。

今年の修了式ではうれしい報告がありました。この地域では以前に比べて妊婦や新生児の死亡率が大きく下がっているとのことでした。「ひとりでも多くの母子の命を救いたい」という基金の目的が確実に実現しつつあるのです。これも趣旨に賛同し、多額の寄付をしていただいた協会員や企業、団体の皆様と現地で教育に当たって下さった方々のご協力があってこそ、と深く感謝しております。

奨学金制度をもっと続けて欲しい、というミャンマーの医療関係者の強い要望もあり、あと3年延長することにしました。引き続き皆様のご支援を何卒、よろしくお願いいたします。

途上国の医療状況　世界が認識すべきです

G20保健相会合　岡山学芸館高の橋本さん提言

岡山市で10月19、20両日開かれた主要20カ国・地域（G20）保健大臣会合の冒頭、高校生3人が英語で提言した。その中の1人、岡山学芸館高校2年橋本綾花さんはミャンマーとカンボジアへの研修旅行の体験をもとに、発展途上国の女性と子どもの医療のきびしい現実を訴えた。

ミャンマーへは昨年12月に1週間、同校生11人が先生2人に引率されて訪問。協会の岡田茂理事長も同行してマンダレーの慈善病院や、2017年に同校生徒の募金と学校側の協力で寄付されたヤンゴンの「学芸館高校産院クリニック」などを見学した。

橋本さんは医療器具の不足や出産に対する日本との違いを知り、このときの見聞をG20会合での大臣への提言で触れた。将来は発展途上国の人々の役に立ちたいと臨床検査技師を目指しており、「今回の提言発表を通して、自分自身の目標がより明確になりました」といっている。

昨年の研修旅行でヤンゴンの自閉症センターを訪れた時、施設長にお土産を手渡す橋本さん（左）

提言（抜粋）

昨年、私はミャンマーとカンボジアでの現実の医療状況を視察する機会がありました。

ミャンマーでは多くの人々は病院とは縁遠く、出産を控えている母親も病院でお産することは消極的でした。カンボジアでは子供たちは医療についての教育も受ける機会がなく、自分たちことは自分たちで勝手に対応していました。

今、「医療を必要とする人すべてに適切な医療を」というのは健康に対する国際的な行動指針になっています。しかし、開発途上国では医療教育を行うことが非常に困難な状況にあり、女性と子どもは医療機関にかかることも難しいのです。このことを世界中の人々が認識する必要があるのです。

寄付クリニック点検 スタート

協会員らがこれまでミャンマーに寄付したクリニック17カ所について、協会は今年度の事業計画で、診療状況の把握や補修の必要性などの点検を決めた。そのスタートとして9月末、岡田茂理事長らがヤンゴン郊外のクリニック5カ所を見て廻った。

岡山プラザホテルグループ3カ所

補修見積書の提出を 患者月600人の所も

岡山プラザホテルの永山久夫社長＝協会理事＝や岡山コンクリート工業（略称オカコン）の池田修社長らグループ企業の12人が参加。「岡山プラザホテルクリニック」（2014年寄付）ではエアコンや大きな貯水タンクがほしいという要望に見積書の提出を求めた。「MGMクリニック」（14年）は周辺の人口が増えて外来患者が月に約600人、週4日開いている歯科も月に70人が訪れていた。「オカコンクリニック」（11年）は比較的綺麗に保たれていたが、玄関の屋根やひさしの修理が必要だった。

あかねクリニック

貯水タンクが完成

2009年寄付の「あかねクリニック」には寄贈した西山央子・協会理事が訪問。湿地帯にあって幹線道路からのアクセスが悪いが、村は来年ヤンゴン市に組み込まれて将来的には橋ができるという。すでに要望があって取り付けていた貯水タンクは完成。屋根の全面的な葺き替えや壁面の塗装など大規模な改装も始まっていた。

下野クリニック

年間の出産千人超

寄付クリニック第1号の「下野クリニック」（08年、下野國夫・協会理事寄贈）の周りは人口が増え、11年に併設された産院での出産が年間千人を超える。ヤンゴン中央女性病院助産学校で助産師を目指す学生の研修場所になっていた。

㊤MGHクリニックでは開設の時に岡山大病院から贈られた歯科診療台が今も使われていた ㊥あかねクリニックに取り付けられた新しい貯水タンク ㊦下野クリニックの産院で研修中の助産師学校の学生＝いずれもヤンゴン郊外

少数民族の村に幼稚園

賛助会員の富安さん寄付

ミャンマー・シャン州西部の山岳地帯に住む少数民族ダヌー族の村に、広島県東広島市の医師富安基晴さんが幼稚園を寄付。9月24日、富安さんや友人らが出席しての贈呈式があった。

タウンポェックェ村は茶の産地。茶畑の作業は家族総出のため、幼い子を預かって教育してもらえる幼稚園が欲しかった。

協会賛助会員の富安さんは巨大サイクロンで大きな被害を受けた大河エーヤワディー川の支流の河口近くの村に昨年、流された小学校を再建して寄付。双子の娘、望彩（のあ）ちゃんと倫彩（りあ）ちゃんの名前をとって「ノアリア小学校」と名付けた。

幼稚園の名前も「ノアリア幼稚園」。村が運営し、3～5歳児を預かる。贈呈式には大勢の村民が正装の民族衣装で集まり、歌や踊りで祝った。

幼稚園の贈呈式に、正装して集まった園児たち

はっきり見えた

先天性白内障の子

放置すれば失明を免れないミャンマーの子ども7人が11月1日、ヤンゴンの国立眼科病院で手術を受けた。岡山市のNPO「ヒカリカナタ基金」（竹内昌彦理事長）の支援で昨年に次いで実現した。

昨年と同様、先天性白内障の子ども8人を予定していたが、直前に1人が感染症で入院したため7人に。手術も同じタントゥンアウン医師（小児眼科）が担当した。手術費用などを負担した同基金の谷口真吾副理事長ら5人は緊張しながら手術の様子を見守った。

翌2日、目を覆っていた眼帯が外され、全員、手術は成功だった。去年の8人のうち5人が遠くからかけつけ、一緒に喜び合った。5人はこの1年間、自分たちの目がはっきり見えるようになったことで将来に希望が持てるようになったといい、「医者になりたい」「学校の先生に」「エンジニアがいいなあ」などと話していた。

今回、入院中だった1人も後日手術を受けた。

手術翌日、目が見えるようになった子供（前列）と親たち＝ヤンゴンの国立眼科病院

岡山のNPO、今年も手術支援

MAJA新事務所、完成

岡田理事長が祝辞

MAJA（ミャンマー元日本留学生協会）の新しい事務所がヤンゴンに完成、9月28日、開所式が行われた。丸山市郎・駐ミャンマー日本大使らとともに来賓として出席した協会の岡田茂理事長は挨拶の中で、第2次世界大戦中にさかのぼるMAJAの起源にふれ、「この事務所が日本とミャンマーをつなぐ架け橋となり、さらに親密な関係が続いてほしい」と話した。

MAJAの会長は協会ヤンゴン代表のミョウキン・元ミャンマー国立医学研究局長。会員には岡山大学への留学経験者が多く、医学界など各方面で活躍している。

事務所はこれまでヤンゴンのビルを間借りしていたが、新たに自前の4階建てビルを建てた。

6年ぶりに訪れる内視鏡学会で講演

岡山大の河原教授

岡山大学病院教授の河原祥郎さん（実践地域内視鏡学）が10月、ミャンマー内視鏡外科学会の総会に招かれ、「消化器内視鏡を用いた診断と治療」について講演した。

河原さんは2013年秋、10日間にわたって新ヤンゴン総合病院で、消化器内視鏡の技術指導をした。ミャンマーでは内視鏡治療がほとんど行われていないころだった。

今回、講演に対して多くの質問が出て、ミャンマーの内視鏡外科の進歩に触れることができたという。

編集後記

G20の保健大臣らを前にした岡山学芸館高校2年橋本綾花さんの提言に「医療を必要とする人すべてに適切な医療を」という国際的な行動指針が引用されています。国連によると、地球上の全人口の約半数が基礎的な医療を受けられていないのが、世界の現実です▼ミャンマーも例外ではありません。西山理事の「あかね基金」の奨学金で准助産師になった女性たちは、医療と縁遠かった出身地に帰って働いています。協会員らが贈った「寄付クリニック」の大半は、かつては無医療に近い所で、それが今は地域の医療センターになっています。医療の行きわたらない所に医療を――。それは協会の活動の中でも大きな柱です。（西﨑）